

---

# 恋する占い玉

エール・クリストファ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する占い玉

### 【Nコード】

N8930V

### 【作者名】

エール・クリストファ

### 【あらすじ】

黒髪碧眼の美形勇者さまが、夢中な相手は「占い玉」。昼間は肌身離さず持ち歩き、夜は枕元で話しかける。「これは誰にも渡さない！」そう心に誓い、奪いに来る男たちを今日も蹴散らし独走態勢。そんな偏愛（変愛？）ストーリー。（いえ、本当は純愛ストーリーなんです…）お話は「占い玉」の目線で進みます。

## プロローグ（前書き）

主人公のサリーのように、のんびりほんわか、ゆったり更新になる  
と思います。

（未完の他作品もあるし…）

## プロローグ

私はその昔、高貴なかたのお膝の上で  
いつもウトウト、幸せな毎日を過ごしていた。

髪を優しく梳かし、時たま耳たぶを弄ぶ  
白く綺麗な長い指。

そつと目を開けて、頭上を見上げると  
紫色の思慮深い瞳が、優しく私を見つめている。

それは魔法の国の王様。

私のことを誰よりも可愛がってくれる。  
大きくて温かい、大切な人。

彼の膝の上で、いつもお花畑の夢を見ていた。  
こんな日が、ずっとずっと続くんだと思っていた。

\*\*\*

しかし、年月が過ぎ、私が大人の姿に成長すると  
男たちからの執拗な視線にさらされるようになる。

王様と離れている僅かな時間に  
何度も攫われそうになった。

強引な求愛を前に涙を流すこともあった。

見かねた王様は、私に魔法をかけた。

誰にも攫われないように

誰も触れることができないように。

ローズクォーツ\*で作られた

丸い占い玉の中に

私を閉じ込めてしまった。

\*\*\*

王様の独占欲は、私が想像していたよりも遙かに強かった。

結局それ以降、彼は二人きりの時以外では私を占い玉から出すことをせず。

そしてそのまま、300年の生涯を閉じてしまう。

王様の魔力でしか、占い玉から出ることができない私は全てを諦めて、長い眠りについた。

\*\*\*

どれほどの時が過ぎただろうか：

辺りが崩れ落ちる音で、私は目を覚ます。  
どうやら王様の城が崩壊の危機に晒されているようだ。

眠い目をこすっていると

青白い顔の男がこちらを覗き込んでいるのが見えた。

「なんと強い魔力を秘めた占い玉だ。  
すごいものを見つけたぞ」

その魔法使いの成り損ないは、魔力のない水晶玉を持ち歩き  
あたかも未来を予見したかのような嘘をまき散らす男だった。

それまでの水晶玉をポイと捨て

私を黒い別珍の袋へ、大事そうにしまい込む。

嫌で嫌でたまらなかったけれど

そこから私の第二の人生が始まった。

\*\*\*

150年もの間、占い玉として眠っていたせい  
か私の中の魔力は、なかなか強大になっていた。

未来も、過去も、世界の裏側も

望めばいくらかでも視ることが出来る力が備わった。

そんな占い玉を、魔法使いたちはこぞつて奪い合った。

最初に王様のお城から私を盗み出した男はあつけなく本物の魔法使いに私を奪われる。

そこで出逢った魔法使いは優しいふくよかな中年女性で王様以来、初めて信じられると思える存在だった。だから多くの過去視、予見、遠視に協力した。

しかしあまりに力を発揮しすぎて

彼女の命と、占い玉が、悪い魔法使いに狙われてしまう。そして死闘の末に、彼女は私を手放すことになる。

最後に見た彼女の傷だらけの姿に

私はそれまでの力の使い方を反省した。

そして新たな持ち主となった、いけ好かない魔法使いには不吉な予見ばかりを、与えることにした。

やがて彼は絶望の末に身を滅ぼすことになる。

それらのことがあつて、私は

『意志を持つ占い玉』

『この世で最強の魔力を秘めた占い玉』

などと、もてはやされるようになってしまった。

\*\*\*

そうして何人もの魔法使いに酷使され続けると

さすがに私の魔力も尽きてきた。

欲望に巻き込まれることに辟易して  
魔力を回復させる気も起きなくなった。

お告げをするのは、ごくごくたまに  
気が向いた時だけ。

既に魔力が失われたと、人々の口にするようになった頃  
私は初めて、魔法使いではない、一人の勇者の懷に納まった。



## ブローグ（後書き）

\* ブローグオーツ<sup>®</sup>ピンクの水晶

## 第1話　かわいいひと

「サリイ~~~~！」

聞き慣れた声で

心地よいまどろみから揺り起こされる。

「はーい、勇者ジークフリード様」

見ると、綺麗な碧い瞳が、こちらを覗き込んでいた。

「化粧くさい女に、襲われた」

はあああ、またですか。

.....

「おい！　二度寝するなよ」

ちっ。

仕方なく、魔法でジークの頬を  
優しく撫でてあげる。

ついでに口紅の跡も消してあげた。

ここはサルルート国の王都ルニ。

繁華街の一角に建つ、中流の宿屋。

質素な部屋のベッドの上にローズクォーツの占い玉を置き

横に寝そべって、話しかける黒髪碧眼の勇者。

はたから見たら十分に異常な風景。  
でも彼にとっては至って日常的な風景だった。

「魔族退治を頼まれたんだけど  
断った方がいいかなあ？」

うるうる、子犬みたいな瞳。  
毎度毎度、甘え上手なんだよね。

過去視で今日の出来事を視てみた。

\*\*\*

仲間を引き連れて王宮へ赴くジークフリード。  
お仕事中は、漆黒の髪に青いターバンを巻いて  
きりつと精悍な表情だ。

切れ長の目、繊細で高い鼻筋。  
軍神の彫像のように完璧なラインを描く頬。  
甘さを漂わせる形の良い唇。  
尖った顎が、美しいパーツを最良のバランスで  
まとめあげている。

たとえそこに怒りの色が浮かんでいても  
その美しい顔で睨まれたならば  
どんな姫でも一瞬のうちに恋に落ちるだろう。

王はそんな彼の美貌に感嘆の声を上げてから

近頃、森で次々起きている猟奇殺人と  
姫をもらっ、という脅迫状の話をした。

すると案の定、ジークの虜となった姫が  
バタバタバタッと走り出した。

「勇者さま。どうぞお助けくださいませ！」

濃厚な化粧の匂い。めまいがするほど甘い香水の香り。  
そしておまけに、真っ赤な口紅までくつつけて  
よよよ…と姫は彼に縋った。

\*\*\*

「あゝ、いつものですね」

ジークがむっとする。

「そんな他人事のような声で言うな」

「だって、いつものことじゃないですか」

「オレはこういうのが苦手なんだ」

「早くあしらう方法を覚えて下さい」

「あの姫はあっさり諦めてくれるだろうか？」

・・・

私は心の中で、つんと横を向いた。

「魔力の弱い今の私には、未来を視ることはできません。  
ご自分でなんとかなさいます」

「冷たいなあ……」

やるせない表情で黒い前髪をかき上げ  
ふうふうと息を吐く。

ターバンを外した後の、  
リラックスした顔が色っぽい。

おっととと、また見とれてしまいました。

・・・クスクスクス。

小さな笑い声が聞こえる。ジークではない。  
そして届く微かなメッセージ。

……目覚め……兆候……

「どうした？」

ジークも気配を感じて、表情を変える。

「あなたの守護精霊からのメッセージです」

ジークフリードはこの世に生まれ落ちた瞬間から

『光』『火』『水』『風』『地』の五大精霊の加護を受けている。  
つまり超天然幸運体質。

五大精霊はとても彼を大切にしている  
戦いの最中に彼の身を守るだけでなく  
こうやって時たま、メッセージを送ってくる。

「何か新たなものが目覚める兆候、と言っています」

「目覚める兆候…」

「ジークも何か精霊から感じるものはありましたか？」

「うん…」

少し布団に顔を埋めてから、再びこちらに顔を上げる。

「暗い森のビジョンかな。やっぱり魔族討伐のことだね」

「そうですね…」

ジークは少し考えて決心がついたらしく  
ガバツと起きあがり、ターバンを秀でた額に締め直した。

「よし、じゃあみんなと夕飯を食べながら  
今後の予定について話し合おう。」

サリーも一緒に来て」

そう言うと、彼は私を拾い上げ  
碧い別珍の袋に、丁寧に入れた。

それを腰ひもに引っかけて  
一旦、動きが止まる。

「何か…とてもかすかに…」

不安のタネみたいなものが見えた気がするんだ」

そして袋の中の私の存在をしっかりと確認してから  
歩き出した。

ジークフリードには私とも精霊とも違う  
独特の勘の良さがある。

だから彼の言う「不安」がどこからくるのか  
私には知ることができなかった。

でも…

ジーク。とんでもない甘えっ子。  
私のかわいいおバカさん。

大丈夫。

私も精霊と共に、いつまでもあなたを見守っているわ。

## 第1話 かわいいひと（後書き）

既に冒頭から変態っぽい？勇者さま。でもかっこいいんですよ！



## 第2話 甘やかしてます（前書き）

急遽、残酷表現のフラグを立てました。この章ではまだ戦いはありませんが、念のためその旨をご了承の上、お読みください。

## 第2話 甘やかしてます

ちょっと甘やかし過ぎかもしれません…

何せ占い玉になってから（正確には閉じこめられてから）

「サリー」と私を呼んだのは、ジークただ一人。

名前を教える気なんて、なかったんです。

初めはジークの懷で、じっと黙って眠ってました。

そしたら例の精霊たちが、わいわい話しかけてきて

いつの間にやら、女子会よろしく

ぺちやくちゃ、ぺちやくちゃ、

おしゃべりが始まったんです。

うつかり、ジークに聞かれました。

変なところに、妙に敏感な彼は

しゃべる占い玉の存在に気付いてしまったという訳です。

「占い玉だから、オレが何か聞けば、占うのか？」

「いえ…あの。私すでに力尽きてまして。

予見はできません。過去視と遠視のみ少々

それもちよつと。どうしても必要な時だけに

お願いしたいです」

ジークはその綺麗な顎の曲線を指で撫でてから

ゆっくりと口を開きました。

「お前の齡は、どれほどだ？」

えーと、1、2…

トータルで266年くらいです。

「そうか。それならオレの相談役くらいは出来るだろ」

それから毎夜、彼の話を聞くという役割を与えられました。

初めのうちは遠慮がちに、勇者らしく、ぼつりぼつり。  
馴れてくると時間を忘れて明け方まで。

そして今はもうさつきみたいな猫なで声で延々と。

仕事のことでだけでなく、プライベートのことを何から何まで  
相談しに来るのです。あ、あれは相談ではないか。  
単なるグチですね。

普段は無口で勇者然としている彼に  
そんな側面があるなんて、はつきり言ってツボでした。  
(ギャップ萌え?)

気付いたら可愛くて可愛くて。  
彼が私を手放さない限りは  
いつまでも精霊たちと一緒に守っていこうと  
心に決めるまでに至りました。

まあ私に出来る事なんて  
夜のグチの聞き役くらいですけど…

だって私はもう懲りているのです。

下手に力を発揮して、魔法使いたちに狙われることに。

だから彼と二人きりでいる時以外では常に眠りについています。

どこへ行くにも彼は私を携帯していましたから昼間はひたすら息を潜めて眠っています。

彼らが王宮へ向かった時にも私は眠っていました。

その様子を確認するのにわざわざ過去視を使っただのはそういう事情あったからです。

\*\*\*

宿の食堂のテーブルで待っていると

人混みの中からアキームとレフが顔を出す。

アキームは筋肉隆々の大男。

そのオリーブ色の瞳で睨まれたら

思わず涙が出てしまいそうな

鋭い目つきと野性的な顔立ちをしている。

クセのある赤毛の上に、ぎゅっとターバンを巻き

腰には大きな剣をぶら下げている。

彼はジークのパーティーに加わる直前まで  
屈強の傭兵として、各地で名を上げ

『西の赤獅子』という異名を得ていた。

レフは彼とは正反対の、見目麗しい美青年だった。  
柔らかい金髪を肩で結び

その上から灰色の長いマントを身に纏っている。  
琥珀色の瞳が美しい、魔法使いだ。

彼は若いながらに北方の賢者の弟子で  
魔術の巧みさと、容貌の美しさから

『北の金獅子』という通り名まであった。

確かに微笑む姿は天使か精霊のようではあったが  
実はかなり狡猾で油断ならないことを  
私は既に気付いていた。

そして私の持ち主であるジークフリードの別名は  
『南の黒獅子』。

それらは周囲の人間が勝手につけた名前であったが  
たまたま同じ仕事で居合わせた時に

3人はとても波長が合い

そのままパーティーを組むことになった。

食前酒で乾杯をし、黄色い液体を喉に流し込んでから  
レフが琥珀色の視線を、チロツと流した。

「それ、今は起きてるんだね。珍しいじゃない」

ぎよぎよっ。

ほらほらほら。やっぱりこいつ油断ならない。

でも私だってちゃんと、こいつ以外に怪しい魔法使いがいないか精霊に確認してもらってから、起きてることにしたのよ。だからひるんだりしないわっ。

「いいよねえ、それ。魔力がある上に意志まで持つてて。

今は大分、力が小さくなっているけど

やり方次第で、どこまでも強大にすることが出来るよ」

「いいんだ」

ジークが緊張した声色で遮った。

「これには今、休息が必要なんだ。だからほおっておけ」

「ふ〜ん…」

レフは悪魔の微笑みを浮かべた。

「そうだとっても、勇者が占い玉を持ち歩くななんて変じゃない？  
やっぱり魔法使いが持っていた方が、自然だと思うけど？」

こいつやっぱり黒い！ 間違はなく黒系魔法使いだよ！

「お前にはやらん」

ジークはそれだけ言うと、不機嫌そうにグビッツとお酒を飲み干した。

おゝよしよし。後で頭ナデナデしてあげるからね。

「そろそろ本題の話をしてもいいか」

給仕された大きな骨付き肉をかじりながらアキームが無表情に言った。

いつもこんな風に他人行儀な3人なんです。それでも波長は合ってるんですよ、ハイ。それはそのうちこの人たちの戦いっぷりを見て頂ければ分かると思います。

「ついさっき、精霊の言葉があった。

新たなものが目覚める兆候、だそうだ。

同時にオレの頭の中に、暗い森のビジョンが映った」

ジークの瞳が海の底のように深い碧色に変わる。

アキームもレフも、黙ってそれを見つめた。

「森か…。少し聞き込みを試みたところ

このところ続いている猟奇殺人は

いずれも獣に食われたように

体の一部を失った状態で被害者が発見されたのだそうだ」

アキームの言葉に、レフも重ねた。

「あの森は確かに人を食らう獣がいたという伝説がある

しかしそれは300年前にどこかの王によって討伐されたであった。

それがもし蘇ったとしたら、獣とは違う何か関わっている可能性はあるな」

300年前の獣を復活させる何か。

新たなものが目覚める兆候。

無関係のように思えるが

しかしそれらがどこかで繋がるような気がしてならない。

それは同じテーブルを囲む者同士

皆同じ思いのようだった。

「引き受けるしかないようだな、この仕事」

戦いの幕開けです。



## 第2話 甘やかしてます（後書き）

ジークは今のところ、3人（サリーを入れると4人）でお仕事しています。

### 第3話 油断ならない魔法使い（前書き）

突然ですが、小説タイトルを変えました。

### 第3話 油断ならない魔法使い

夜の帳の中、魔力が近づく気配に私は目を覚ました。

何事か確認する間もなくスルツと枕元から持ち上げられてしまう。深く眠るジークはそれに気付かない。

やばっ、油断した。

私はそのまま、別の部屋へ素早く持ち込まれる。

ボタンとドアが閉まり鍵のかかる音。

やっと気付いた。この気配はレフだ。ポトンと私をベッドに落としギシリと横に腰掛けた。

「やあ、やっと二人きりだね」

私は答えず、必死で眠りに落ちようとする。しかし魔力に邪魔される。こいつー！

「ジークとばかり話してないでいい加減、ぼくにも声を聞かせてよ」

彼の繊細で綺麗な指が  
占い玉を撫でる。

私はその中でちぢこまって  
羊が一匹、羊が二匹……

「抵抗しても無駄だよ。  
僕を誰だと思ってるの。」

賢者の免許皆伝まで持っている  
真正正銘の魔法使いだよ。

それなのに勇者には聞こえる声が  
聞こえないなんて  
プライドが許さない」

そ〜よね〜。でも私はジークだけのもの。  
羊が60、羊が61……

「……強情だよな。キミ。  
まあそこが可愛いんだけど」

琥珀色の瞳が近付いてきて  
綺麗な形の唇がすぐ近くで動く。

「今夜は絶対に寝かさないからね」

って、誰に言ってるんだ、こらー！  
羊が110！ 羊が111！

「突破！」

ボタン！

扉を大きく開いて

息を切らしたジークフリードが登場。  
きゃー！待ってたのよ。助けてっ！

「あゝあ、もう気付いちゃったの？」

グラリ、レフは辛そうに片目を瞑る。

「そうやって魔法を乱暴に破られると  
僕だって傷付いちゃうんだけど」

先ほどのまでの余裕から一変して  
天使のような金髪の下に冷や汗が浮かんでいる。

「ふん。自業自得だろ」

ジークは冷ややかにそう言って  
ひょいと私を持ち上げる。

「これに手を出したら

その度に魔法を破る。そのつもりでいろ」

レフは自嘲気味に口元を歪ませ  
パサッとベッドに倒れ込んだ。

「せいぜい、明日の朝まで  
しっかい眠って回復しておけよ」

振り返りもせずにそう言って  
ジークは部屋を出た。

\*\*\*

「サリー！　すぐにオレを呼べよ！」

ジークは部屋に戻るなり  
詰め寄ってきた。

「だってレフの魔法に妨害されてたし」

「占い玉のくせに、弱っちいなあ」

むっ。　なによ。

むくれる私の前で  
彼はふうふうと大きく息を吐き  
肩を落とした。

「まあまだレフで良かった」

その言葉にちよつと考えて、私は聞いてみた。

「もしレフよりももっとすごい魔法使いとか  
魔族とかに攫われたとしても  
助けに来てくれる？」

ジークは碧い瞳を見開き、一瞬息を飲む。  
そして見る見る赤い顔になって、横を向いた。

「当たり前だろ」

えーと、これは勇者と占い玉の会話です。  
念のため…

### 第3話 油断ならない魔法使い（後書き）

なんか、占い玉をはさんで、こつゆつ会話になるなんて…。筆者も書いててビックリです。



## 第4話 森の闇

翌日は、まだ早朝の霧が消えないうちに宿を出た。

目指すのはこの繁華街から1時間ほど歩いた先にある森。

（勇者たちは普通の人より歩くのが速いので

もし普通の人が歩いていたら3時間くらいかかる）

ジークもアキームもレフも

押し黙ったまま歩みを進めた。

まあアキームはいつも無口だけど

ジークとレフまで無口なのは

もちろん昨夜のやりとりのせい。

すると珍しくアキームが口を開いた。

「これから行く森について

その占い玉は何か映し出したりしないのか？」

私について、あまり触れて欲しくないジークは  
眉間に皺を寄せて、アキームに視線を送った。

「特にない」

剣もほろろ、とはまさにこのこと。

肩をすくめるアキームの様子にハツとして  
ジークは目を伏せてから、再び口を開いた。

「占い玉には、特に何も映っていないが  
オレの感覚には、少しひっかかるものがある」

「ぼくもだ」

レフが低い声を漏らした。

「今朝、出かける前に森を遠視してみた。

あれは闇を内包している。

魔族は…正確には魔獣だが

契約を結んで、その闇を守護しているようだ。

森に踏み込む何者をも許さない」

レフは占い玉なんてなくても

立派に遠視が出来る。

つくづく私なんかにかたわるるのは

プライドのためだけなんだよね。

「なるほど」

アキームが頷いて、オリーブの瞳を細めた。

「国王に対して、姫を攫うなんていう予告状を送ることは

魔獣にはできない芸当だからな。それで納得した」

闇を内包する森。

私もそれは感じていたけれど

何か強い力の壁に阻まれて

意識がそこから弾かれてしまう。

それは何故か、遠い昔にも  
経験したことがある感覚のように思えた。  
あれは何だったろうか…

「闇を内包する森。

なるほど、警戒すべきは魔獣よりも  
森自体ということか。

オレの中に見え隠れする不安のタネも  
そこから来るもののようだ」

言いながら、ジークはこっそり手を懐に入れて  
袋の中の私を確認する。

大丈夫、大丈夫。

何があっても、傍にいますからねー。

\*\*\*

森の姿が見えてくる。

一歩一歩進む毎に、拒絶の意志が強くなる。

私は耐えきれなくなつて  
仕方なく眠りについた。

（わーん、肝心な時にゴメンナサイ）

.....

しばらく眠っていたら

急に重苦しい圧力を感じて、目を覚ました。

ぎしぎしぎし...

ちよつとちよつと、そんなにしたら

ローズクォーツが壊れるよつ。

次の瞬間、2つの赤い目が

パクリと開いて、こつちを見た。

途端に私の心は凍り付き

そこから目を離せなくなった。

深い闇の中に浮かぶ

禍々しい意志を持った、血のように赤い目。

ミツケタ。

テンセイシタノデハナカッタノカ。

コンナトコロニ

イキナガラエテイタノカ。

サリー...！

ひいひいっ！

激しい感情の嵐に吹き飛ばされそうになって  
息を飲んだ。

しかしそれはスツと、急激に冷えていった。

マダダ…

シカシカナラズ

ムカエニクルゾ。

マツテイロ…

言葉が徐々に遠ざかり

そして同時に圧力も消えた。

私はヘナヘナと力を抜いた。

\*\*\*

私が眠っていた間、ジークたちに何が起こっていたか  
過去視してみた。

彼らが森の入口に到着すると  
間もなく空気を震わす吠え声が聞こえてきた。

そして黒い影が、木々の間を  
ものすごい早さで移動する。

右へ左へ、網の目を描くように  
秩序無く動き回り、恐怖と攪乱を植え付けようとしている。

ジークはスラリと剣を引き抜いて目を閉じる。

カチャリと鞘が鳴り  
鋭い切っ先が濡れたように光る。

次の瞬間、頭上から足元へ一直線に  
剣が振り下ろされた。

無音の一斬。

空気を切ったようにしか見えなかったが  
直後に獣の激しい叫び声が、空気を切り裂いた。

キエエエエエ…！

それを合図にアキームが剣を引き抜いて  
両手に構える。

レフが呪文を唱え始める。

彼らの前に姿を現したのは  
黒い毛に覆われた巨大な狼だった。  
背中にはコウモリのような大きな翼を広げている。

しかし、片翼がすでに切り落とされていた。  
ジークの一振りのせいだ。  
そこから緑色の血が流れ出していた。

長い鼻にシワを寄せ  
真つ赤な瞳を怒りに燃え上がらせ  
低い咆哮を洩らす口からは  
荒い息と唾液を垂れ流している。

しかしジークはそれに目もくれず  
一瞬でその脇を走り抜けた。

手負いの獣の相手は  
アキームとレフがする。

黒髪の勇者が目指すのは  
森の奥に潜む、黒い闇。

居場所も正体も分からないそれを  
ジークはその鋭敏な勘だけで、追い詰める。

やがて森が割れ、おもむろに現れる漆黒の泉。  
そこでピタリと足を止めた。

底の見えない泉から  
ゆらゆら沸き立つ禍々しい気配に

ジークの黒い前髪が揺れる。

まわりつくそれを振り払うように  
シュツを空気を斬る音が響く。

彼が容赦なく振り下ろした剣は  
泉を一突きしていた。

ブワッ

闇が巻き上がり、宙を舞い、回転する。  
そして龍のように立ち登った。

気付くとその中央に、ローズクォーツの占い玉が浮かんでいた。

ジークは懐にあるはずの重みが消えていることに気が付き  
初めて焦った。…いつの間に！

「サリー！」

地面を蹴って、手を伸ばす。

彼の体を、精霊の光が包み込む。

すると、渦巻いていた闇は霧散し  
残された占い玉が、ジークの手に納まった。

闇の気配はそのまま消え失せた。



黒い泉も消えた。

何事もなかったかのように  
森の沈黙が戻ってきた。

その頃、アキームは宙高く跳躍し  
剣を振り下ろしていた。

その一撃で、獣の背中が真つ二つに割れる。

緑の血が噴き出して  
ズシンと黒い影が地面に沈み込む。

レフがその横へ歩み寄り  
指を二本立てて、空に突き上げる。

呪文を唱えた後に、言った。

「汚れた魂を手放し  
土に還れ」

獣は一瞬で、骨だけの骸と化した。

\*\*\*

私の過去視はそこまで。

今は森を歩くジークの手の上の  
占い玉の中で力なく縮こまっている。

さっき聞こえた声はなんだっただろう…  
でも思い返すだけで背筋に冷たいものが走り、ゾツとする。  
やっぱりそれについては、何も考えたくない。

アキームとレフが私たちに気付いて振り返った。

占い玉の表面は、パチパチ火花を散らしていた。

「闇に触れたんだな」

そう行つて、レフが近付いてくる。

「今なら、出来るかもしれないぞ」

訝しむジークを横目に、レフは白い手を  
占い玉の上にかざした。

目を閉じて、呪文を唱える。

次の瞬間、占い玉の中に光が差し込んできた。

私が驚いて顔を上げると

それは目の前でカーテンのように広がった。

やがでその光の中に、私自身も溶け出し  
意識が真っ白に浄化されていく。

そして体がふわりと、宙に浮かぶような感覚に襲われた。

## 第4話 森の闇（後書き）

次はジーク目線のお話になります。

## 第5話 はちみつ色の幻（ジークの視点から）

レフが手をかざした瞬間

占い玉から飛び散る火花が

激しさを増した。

ピリピリと全身に痺れが走ったが

オレは手を離す訳にはいかなかった。

これは今、オレにとって一番大切な存在だ。

たかが占い玉一つに、と思われるだろう。

それも大した魔力を発揮するわけでもない。

しかしその声は、戦いで荒んだ心を

丸ごと受け止め、真綿のようにくるんでくれる。

勇者であるオレの

常人には到底理解しがたい感情に

そっと寄り添ってくれる。

そしてどんな嘆きや絶望も

全て希望に挿げ変えてくれる。

子供のようだと笑われても構わない。

オレはあれがないと

真っ直ぐ前を見て生きていくことができないんだ！

ミシミシと、ローズクォーツが軋んでいる。

「やめろ！それを壊すな！」

気付いたらそう叫んでいた。

レフの手をはね除けようとした時  
占い玉の周りにフワリと光が生まれた。

それは温かいはちみつ色で  
どんどん大きくなってくる。

その光景に  
突然、新たな期待が沸き上がり  
オレの胸が跳ね上がる。

もしかして…

期待が期待通りであるように  
神に祈りながらその光を見つめた。

すると光の中に  
ゆらりと人の形が浮かんできた。

それに気付いて、レフとアキームが  
ゴクリと唾を飲み込んだ。

徐々に輪郭が、色が、鮮明になる。

やがてそれは、一人の少女の形をとっていった。

ハニーブロンドの長く豊かな髪が

やわらかい光を放ちながら波打っている。  
子犬のように濡れた茶色の大きな瞳は  
驚きで見開かれ、きらきら輝いている。

少女らしい控えめな鼻筋と  
甘やかに染まる薔薇色の頬。

熟れたばかりの果実のような  
ピンク色の唇はふくよかで  
思わず触れてみたくなる。

彼女は白くて華奢な体を  
丸めた状態で宙に浮かんでいた。

「女神か…？」

アキームの声で

彼らも同じ場所にいたことを思い出す。

駄目だ。彼女を見てもいいのは  
オレだけだ。

しかしそんな心の声は叶えられる筈もなく  
二人は両目を見開いて、彼女を凝視していた。

少女はアキームの言葉を否定するように  
何度か首を横に振った。

そしてその大きな茶色い瞳を  
オレの方へ向けてきた。

「サリー……」

その名前が反射的に口からこぼれると  
彼女は白い両腕をオレの方へ伸ばしてきた。

それを受け止めたくて  
オレも手を伸ばす。

しかし次の瞬間、スツと光が消えて  
目の前には占い玉と  
暗い森の景色だけが残された。

何が起きたのか理解できず  
オレはしばらく呆然と宙を見つめていた。

「サリーと言っていたな。  
あれは占い玉の中にあつたものなのか？」

アキームの問いに  
レフが頷いた。

「そうだ。闇に触れて  
一時的に魔力が強まっていたから  
外から力をぶつけて、引っ張り出してみた」

言ってから、レフにしては珍しく  
僅かに顔を赤くして、口に手を当てる。



「まさかあんな姿をしているとは思っていなかった」

「ジークはいつもあれと話していたのか？」

アキームも興味を引かれたようで複雑な表情をして聞いてくる。

オレは二人のそんな様子が何故かどうにも我慢できなかった。でもだからと言ってどうすればいいのかも、分からない…

「そうだ。声は聞いていた。しかし、姿を見たのは初めてだった」

そう答えてから、レフの方へ歩み寄りがいつと間合いを詰めた。

「レフ」

「な、なんだ」

「もう一度やれ」

は？と呆けた顔をしているので更にニジリと間合いを詰める。

「もう一度やれ！」

「む、無理だ！」

レフがオレを手で制して、必死で答えた。

「あれは占い玉が闇に触れた直後だったからできたことだ。今はもう無理だ！」

それに出来るならお前に言われなくてもやってる！」

なんだそれは！

オレの心の中に

もう一度会いたいという炎のような思いと誰にも横取りされたくないという焦燥感が嵐のように吹き荒れた。

「出来る奴はいないのか！？」

「ぼくの師匠の賢者であればもしかしたら…」

「よし！行こう」

「待て待て待て！」

走り出そうとしたオレの首根っこをアキームの太い腕が掴み上げた。

「魔族討伐の依頼主のことを忘れていないか？」

仕事の後始末と報酬の受け取りはキチツとやらなくてはならない。  
それに…」

言いながら、オレの手の上の占い玉を指さす。

「本人に聞いてからの方が  
いいんじゃないか？」

・・・

くやしいが、アキームの言うことは正しい。

呼吸を整えて

サリーの様子を伺った。

「先程の衝撃で  
今は眠っているようだ」

「よし、まずは仕事を終わらせて  
その後でじっくり考えよう。  
オレもその占い玉の言葉が聞いてみたい」

横でレフも頷いた。

聞かせてやるものか！と思うものの  
この状況でそれは無理なんだろうなと  
オレは大きなため息をついた。

## 第5話 はちみつ色の幻（ジークの視点から）（後書き）

頑張れ、ジーク！ 次からまたサリ―目線に戻ります。

## 第6話 闇の声

み、見られた…！

どきどきどきどき…

激しい鼓動が占い玉の中を響き渡っている。

あの時、目の前が真っ白になって

何かがぶつかるような衝撃を感じた。

そして目を開いたら

驚いたジークとアキーム、レフの顔があった。

私の体はまだ占い玉の中だったけど  
意識だけが外に引っ張り出されていた。

だけど彼らには、私の姿が見えるみたいだった。

「女神か？」というアキームの問いに  
頭をぶんぶん横に振って否定する。

そんな神々しいもんじゃないです。  
確かに260年以上生きてる（？）けど。

ジークに視線を移すと、今までに見たことがないくらい  
目を見開いて、凍り付いている。

「サリー…」

その綺麗な口元から私の名前が洩れる。

そうよ、そうよ。私はあなたの占い玉よ。

嬉しい気持ちがあふれ出して、両手を伸ばすと

彼もそれに応えるように、こちらへ手を伸ばしてくれた。

あと少しで届く…

そう思った時、景色は暗転。

私の意識は、占い玉の中に戻っていた。

あゝ、良かった…。

手が届かなかったことを残念に思う気持ちもあったけど  
それよりもずっと、元の場所に戻れたことに  
安堵する気持ちの方が大きかった。

ただの人間だった時間よりも  
占い玉稼業の時間の方が、遙かに長いからな。

正直、もう私には人間に戻りたいなんて気持ちは  
これっぽっちも残っていなかった。

このままひっそりと、ジークの傍にいられるだけでいい。

でも… ジークはどう思ったかな？ 私のこと。

元は人間だったこととか

こんな姿なんだってことを知ってしまったら

彼は私に対する態度を

変えてしまったりするのだろうか…

そんなことをいろいろ考えて

私は赤くなったり、青くなったり…

そのうち頭が重くなり

襲ってきた睡魔に抵抗できなくなった。

\*\*\*

私が眠っている間、彼らは今回の

魔族討伐の依頼主のもとを訪れていた。

その様子は、過去視で確認。

お城の謁見の間では、討伐完了の報告を聞き  
国王はもちろん、大喜び…

と、なりかけたところで  
ジークが静かに手で制した。

漆黒の美しい瞳が、国王と側近の人々の顔を見渡し  
浮き立つ空気を無言で諫める。

「姫を攫う、と書かれた脅迫状を  
見せて頂けますか」

ジークの落ち着き払った声に圧倒されつつ  
国王はこくこく頷いて、宰相に指示を出す。

うやうやしくトレイの上に載せられ、差し出されたのは  
銀色の小箱だった。魔封じの術がかけられている。

レフが進み出て、小箱の術を軽く指で払う。

鍵がカチリと外れる音が響いて  
その場にいた人々が、息を飲んだ。

中から出てきたのは、漆黒の封筒とカードだった。  
文字は銀色のインクで刻まれている。

レフは綺麗な指でつまみ上げ、それぞれを確認した。

「確かに、あの闇と同じ魔力を感じます」

そうか、とジークが無表情のまま頷く。



「それで、その効力はどうだ？」

「既に目的を完了、もしくは失っているため  
しばらくすれば自然消滅するでしょう。

しかし微細な魔力であつても、場合によっては  
周囲のものに悪影響を及ぼすことがあります。  
この場で間違いなく消しておくことが最善かと」

静まりかえる広間の中、ジークは馴れた様子で  
国王に向き直った。

「ということです。残りの魔力をこの場で浄化して  
よろしいでしょうか」

あまりこういったことに馴れていなさそうな国王は  
戸惑いながら、頷いた。

「う、うむ。よろしく頼む」

その声を合図に、レフが呪文を唱え始める。

すると彼が纏っていた灰色のマントがふわりと舞い上がり  
フードが外れて、そこから綺麗なブロンドの髪がこぼれた。

琥珀色の瞳が金色に妖しく瞬き、彼の美貌を際立たせる。

思わず皆が見とれていると、彼の白い手が  
漆黒の封筒とカードの上へ移動した。

パツと閃光が走り、その中で小さな黒いものが

苦しむようにうごめく。そして粉々に粉碎された。

直後に光も封筒もカードも消え失せ

空っぽの銀の小箱とトレイだけが残された。

すると次にジークが両手を広げて目を閉じる。

何か小さく唱えると、彼の細身な身体を中心に  
ふわりとやらわかな風が沸き上がった。

その風はスツと、周囲に広がって

人々の頬に触れ、カーテンを僅かに動かし

そして部屋の外へ流れ出していく。

やがて漆黒の髪の実者は目を開けて、ほつと息を吐いた。

「魔力を浄化した後、精霊の力で城を清めました。

これでもう安心です。姫君の危険もないでしょう」

おおおおっ！と、今度こそ広間に歓声が溢れた。

そして国王の横から、バカ娘…もとい姫が登場。

「お助け下さいまして、ありがとうございます。勇者さま」

お化粧バツチリの目元を、パチパチパチ瞬かせ  
ジークの側に駆け寄った。

「民だけでなく、可愛いサリーをも救って頂き  
心から感謝する。

そなたたちの希望は何でも叶えるぞ。

姫婿の座も、やぶさかではない」

明らかに親バカな国王も、興奮気味で言う。  
この親にして、この子あり…

っていうか、「サリー」？

え、この姫、私と同じ名前だったんだ。

ジークとアキムとレフは一瞬、顔を見合わせたが  
努めて表情を変えないまま、再び国王へ顔を向けた。

「我々は、戦いを生業とする身ゆえ

常に魔の亡霊につきまとわれております。

私と結ばれるとあれば、亡霊は伴侶にも否応なく襲いかかるでしょう。

そのような重荷は、姫には似つかわしくないかと…」

亡霊…

ジークの言葉はもちろん、でまかせだったが

レフの魔術と彼の精霊の力を目の当たりにしたばかりのタイミングでは

十分説得力のある単語だった。

姫は簡単に震え上がり、国王も顔を蒼白にした。

「わ、分かった。では欲しいものを何でも言ってくれ」

結局、はじめから提示されていた報奨金と

今後、勇者から要請があった際には協力を惜しまないという

契約を交わして、城を後にした。

今回の件は、そうして無事に決着がついた。

いや「無事」ではないと、心のどこかが警告する。

狙われた私と同名の姫。

闇が発したあの言葉。

そして呼び声。

マッテイロ…

そう言っていた。

身に覚えがないのか、と問われると  
それはいくらでもあった。

私に痛めつけられ、恨みを持っているだろう  
魔法使いたちはたくさんいる。

そして彼らは既にこの世の者ではない。

闇の魔力で復活し、復習しに来る可能性は否定できない。

でも、名前まで知っているなんて…

私の頭を、一つの可能性がよぎり

あの血のように真っ赤な目を思い出して

恐怖が吹き出す。

しかし頭を振って、その可能性を必死で否定した。

違う。あの方である筈がない…

私は神に祈らずにはいられなかった。

## 第6話 闇の声（後書き）

このへんのお話は、さうと終わらすつもりだったのですが、結構長くなってしまいました。

## 第7話 変化する思い（前書き）

何日も間が空いて申し訳ありませんでした。いろいろ別のことで忙しくなってしまうのと、ちょうど重要な場面だったので、執筆にも時間がかかりました。文章力のない自分を改めて不甲斐なく思う今日この頃です。

## 第7話 変化する思い

「風呂場にまで持ち込んでいたから  
一体どういう変態なんだと思っていたんだが  
今日のアレで合点がいった」

「なんだそれは…」

ジークが盃に唇を寄せながら  
碧い目で声の主を睨む。

しかしアキムは至って大真面目のようだ。  
笑いもせず、からかっている様子もなく  
至って平静。まあそもそも  
簡単に心の内を見せるような男じゃない…。

お城から戻ったジーク、アキム、レフの3人は  
宿の食堂でお酒を軽く酌み交わしているところだった。  
私はちょうど遅い昼食が終わった頃に  
目を覚ましたらしい。

「ぼくもさ、ジークが内緒でしょっちゅう  
腰の袋を確認してたの、気付いてて  
大丈夫なの？って思ってたんだよね」

レフの方は天使の顔に  
意地悪い悪魔の微笑みを浮かべていた。  
黒い！ こいつ本当に黒い。



ジークはむすつとしながら、僅かに耳を赤くした。

「ほっとけ」

そっぽなんて向いちゃって、拗ねてます。

あゝ、癒される。

やっぱりあんたはカワイイ。誰かさんと違って。  
なんか私まで苛めたくなってきた…

密かにムラムラしていたら

「おつ。目を覚ましたみたいだよ」

レフの言葉で、テーブルの上の袋に入った私に  
視線が集中する。わわっ

「よしっ。じゃあジークの部屋に行こう」

「そうしよう」

「なっ。ちょ、ちよっと!」

アキームとレフが勢いよく立ち上がり  
さっさとそこを歩き出す。

ジークはあわてて私をテーブルから取り上げ  
その後を追いかけた。

「なんだよ、オレの部屋って」

「もちろん、サリーと話をするためだろ」

レフの答えに、一瞬哑然としたが  
我に返って、慌てて二人に追いつがる。

「サリーに話って、どういうことだよ」

「なに？ この期に及んで  
まだそれを独占しようって訳？」

レフは苛ついた様子で  
琥珀の瞳に、悪魔の色を濃くした。  
冷たい美貌が凄みを増す。

「ぼくらに毒を盛られて横取りされる前に  
4人で話す場を持つておいた方が、賢いと思うけど？」

さ、さすが黒魔法使い！ 脅し方が板に付いてます。  
てゆうか、あなた味方キャラでしたよね…？

ぐぐぐ…、とジークは言葉に詰まった後  
はあゝっと肩を落とした。

そして渋々、二人を自分の部屋へ招き入れた。

\*\*\*

質素なベッドの真ん中に

私（占い玉）がポトンと落とされ  
その回りに魔法使いと傭兵と勇者が  
ぐるりと囲んで腰を下ろす。

「さて、顔を合わせた訳だし  
さすかに口をきいてくれるよね？  
サリー」

名前を呼ぶなんて  
馴れ馴れしいぞ、黒魔法使い！

ふてぶてしさに、むっとして  
私はとことん抵抗したかったけど  
レフ、そしてアキムまでが  
眼力に気迫を込めて  
のしつと詰め寄ってくる。

本当はジーク以外と言葉を交わすなんて  
したくないんだけどなあ…。

でも、これ以上無視をし続けると  
彼への風当たりが益々強くなりそうだ。

ここは仕方ないか。

ああ、私ってつくづく弱い…

「少しだけですよ。  
私の所有者はあくまでも  
勇者ジークフリード一人ですから」

ため息混じりでそう言つと  
周囲は息を飲む。

「気のせいじゃない。声が…」

「しゃべつた…」

「サリー…」

それぞれに思い思いの声を漏らし  
彼らは一段と包囲網を縮めてきた。

私が占い玉の中でダラダラ冷や汗をかいていると  
明らかに興奮している二人を目線で制して  
ジークが最初に会話の口火を切るうとしていた。

今まで決して人前で私に話しかけなかった彼。  
でもそんなこと、どうでもよくなってしまうくらい  
その質問だけは誰にも奪われなくなかったのだろっ。

「サリー、きみ

もとは人間だったの？」

とても真剣な眼差しだった。

「…そうだよ」

私は小さな声で、すごく短く答えた。

だってね、それって私にとっては  
もう何の意味も持たないことなの。

250年間、占い玉から出られずにいたのだから  
かつて人間だった16年なんてそれこそ  
束の間の夢みたいなものだ。

ジークが見たあの姿は  
ただの幻でしかないんだよ。

しかしその答えが  
ジークにとってどれだけ大きな意味を持つのか  
次の瞬間、思い知らされることになる。

彼の碧い瞳がみるみる輝きを増し  
こちらを見つめる視線に熱がこもる。

まるで、少年が宝の地図を見付けたように  
沸き上がる喜びと期待を押さえることが出来ずに  
微かに頬を上気させる。

占い玉である私へ向けていた気持ちが  
明らかに別の形を取り始める。

そして堰を切ったように  
甘やかな感情が流れ出した。

が、すぐに躓いたようにカクンとそれが止まり  
瞳にみるみる深い影が射し込んだ。

「サリー、キミは何者かの魔力でそこへ閉じ込められたんだね？」

ジークは掠れた声で聞いた。

私は肯定の意味の沈黙を保った。

「どうして…」

更に質問してくる彼に私は力なく答えた。

「独占欲：だと思う」

するとギリツと歯を食い縛る音がする。

「オレはきみをそこから救い出したい」

低いけれど強い口調でジークは言った。

「無理よ」

感情のない声で私は否定した。

「あの方でないと、この封印を解くことはできない。そしてあの方は遠い昔、この世を去ってしまった。私を置き去りにして」

言い終わると、ジークの気配が変化したことに

気が付いた。

視線を上げると、そこには  
烈火のごとく  
怒りの感情を爆発させている  
彼の姿があつた。

「誰なんだ、それは！」

敵前ですら聞いたことのない荒々しい声に  
その場にいた誰もが、目を見張った。

「エルドラードの国王、ヴァンクリフ」

燃え上がる瞳に操られるように  
私は意思を失つたまま  
機械的に口を動かしていた。

「150年前に滅亡した魔法の国の  
伝説の王か……」

アキームが呆然と呟き  
レフが目を細めて黙りこむ。

ジークは身の内の焰をグツと押さえ込みながら  
低い掠れ声で言った。

「亡者相手では分が悪いな……」

ってちょっと、何しよーと考えてる訳？

すると何かを考え込んでいたレフが  
神妙な表情で口を開いた。

「あの闇の魔力は

サリーの占い玉と共鳴していた」

その言葉に、私の胸がドキンとした。

「闇の魔力であれば、もしかしたら

サリーを閉じ込めている封印を

破ることが出来るかもしれない。

そしてあの闇はほぼ間違いなく

エルドランド国と関わりがあると思う。

サリーは何か思い当たることはない？」

占い玉の中にいて表情が見えないことに

感謝しながら、声が震えないように話した。

「分からない。闇へ意識を向けると

何か強い力ではね除けられてしまうの……」

嘘ではなかった。

ただ、あの赤い目と禍々しい声のことは

言いたくなくて、見抜かれないように

必死で心に蓋をした。

そうか、とレフは頷き、言葉を続ける。



「あの闇は、まだ微力で  
魔獣を操るくらいのことしか  
出来ていなかった」

占い玉の中の私の、耳を塞ぎたい思いなんて  
彼らに分かる筈もなく  
その場の思考は闇の存在へと集中する。

「姫を拐うと書かれた手紙。  
あれは手紙という形をとってはいたが  
正体は使い魔だ。  
人の中に忍び込み、密かに  
闇の意思を植え込むことが  
本来の目的だった」

あの時、レフの白い手の下で  
黒い小さなものがうごめき  
粉々になった光景が思い出された。

そしてその後、ジークは精霊の力で  
城を清めていた。  
あれにはそういう意味があったんだ。

黙って聞いていたジークは  
宙を睨みながら口を開いた。

「オレは森の奥の黒い泉を斬りつけ  
そこに精霊の力を流し込んだ。  
すると闇は霧散して消えた。しかし……」

言いながら、彼の目元に  
ほの暗い感情が浮かび上がる。

「そんなもの、一端を僅かに払った  
だけのことだと、その時の感触が伝えてきた」

彼の碧く静かに燃える瞳が  
まだ見ぬ、恐らく今までで最大の敵を  
捕らえていた。

「あれが正体を現すのは  
きつとこれからだ」

マッテイロ…

闇の声が再び頭の中に響いてきて  
私は逃げ出したかった。

「ぼくの師匠は、エルドラードについて  
多分、最も詳しい人物だ」

レフは静かに言って  
二人に視線を巡らせた。

「話を聞きにいくか」

沈黙の中で、彼らは頷きあっていた。

## 第7話 変化する思い（後書き）

ふゝ。なんとかここまで。さて次は、ジークとサリーの甘々タイムで発散だ！

## 第8話 もう一度…

3人の間で、北の賢者を目指して旅立つことが決まるとジークはさつさと会議の終了を宣言し二人をグイグイ部屋の外へ追い出した。

「じゃあ、明日！ おやすみ」

ガチャリと鍵をかけ、ついでに精霊の力を借りて丁寧な結界も張り、窓もカーテンもキッチリ閉めてやっと安心したように、ふう〜っと肩を落とした。

そして少し日焼けした綺麗な顔を上げると

ベッドの上の占い玉へ視線を移してから  
ゆっくり歩き出した。

カツカツカツ…

歩み寄るにつれて、徐々にその碧い瞳が熱を帯びる。

ギリリとベッドに腰を下ろして、毛布に右手を突き  
前髪がかかるくらいまで近く、精悍な頬を近付けてきた。

「サリー…」

絞り出された声は、苦しげに掠れている。

「二人で、遠くへ逃げようか…」

宝石のような碧眼を、あふれる思いで潤ませながら  
占い玉の中の私を捕らえようと、深く覗き込んでくる。

あ、甘い！ 甘いよ！その瞳。

ドッキドキの私の目の前で

形の良い口元から、甘やかな微笑みがこぼれた。

「なんて、出来ればとつくにやってるよな…」

自嘲気味に瞼を伏せ、黒い前髪をかき上げる。

くううう… たまらん。

思わず魔法で、頬を優しく撫でてあげた。  
すると長い睫の下で、碧い光が揺らめいた。

「魔法じゃなくて、サリーの手で触って欲しいな…」

ズギューン…

瞬殺されて、声を出せずにいると

綺麗な指が、スツと占い玉の表面をさする。

「どうしたの。声を聞かせてよ」

な、な、な…

なんなの、なんなの、なんなのーっ！

昨日までの甘えたな男の子が

なんてたった一日で、こんなフェロモンむんむんになってんのよ！

ゆ、ゆるせんつ。

私は魔法でジークの右耳を思いっ切り引っ張り上げた。

「いたたたたっ！ ごめん！ って何、怒ってるのー？」

「なんかむかつくのよっ」

「な、なんだよ、それ！」

痛みに涙を溜めている姿を見て

ちよっとイライラが納まったので、開放してあげた。

しかし、お年頃の勇者様は

一度、色に染まってしまうと、もう取り返しがつかないらしい。

「なんで機嫌悪いの？ 教えろよ」

怒られた子どもみたいに膝を抱えて

チラリと流し目でこちらを見る姿すら、色っばい…

あゝ、だめだこりゃ…

「他の人に、私の名前を教えた罰よ」

そう言うと、ジークは見る見る肩を落として

子犬のように、キューンと小さくなった。

「ごめん…」

それだけ言っと、膝に顔を伏せてしまった。  
少しの間、そのまま沈黙して動かない。

やがで顔を上げたけど、こちらを見ようとはせず  
横を向いて、口に手を当てた。

「オレも失敗したと思ってる。あいつらに声まで聞かれて…」

そーよそーよ、寄りにも寄って、あの二人に。

「あいつらがいる所で姿なんか見せたサリーが悪いんだっ」

む。な、なんだとっ。

そんなの、私の意志じゃなかったでしょ！

しかし私が言い返すよりも先に

「どうしてオレと二人きりの時にしてくれなかったんだ！」

彼は、そう吐き出していた。

ギシッ

気が付くと、ジークは顔を上げ  
切なげな表情でこちらをじっと見つめている。

「サリーはオレのものなのに…」

じりじりと、灼けつくような視線が私の胸に何かを刻み付けようとしている。

「ねえ、もう一度、姿を見せてよ…」

ギシッ

再びベッドを軋ませて、ジークが身体を近付けてくる。

「そんなの、無理って知ってるでしょ！」

つつい声がうわずってしまう私の上にグラリと彼の影が覆い被さってきた。

「綺麗だったな、サリー…」

既に直視できなくなった私の耳元にうつとりと夢見るような彼の声が届く。

「ハニーブロンドの髪はとても柔らかそうで指に絡めて、梳かしたかった」

はあっ…と、熱い吐息が漏れる。

「大きな茶色い瞳が可愛くて、

そこにオレの姿だけを映したかった。

白くて華奢な身体は儚くて

丸ごと抱いて胸の中に閉じこめてしまいたかった」



い、一体、どんな顔して言ってるの！

思わず視線を向けてしまい、すぐに私は失敗を悟った。

待ち構えていた碧く燃える瞳が、容赦なく私の意識を絡め取りあふれ出す思いのうねりに、巻き込んでいく。

そして身動きが出来なくなった私の心へ

更に彼は言葉をねじ込んできた。

「柔らかそうなバラ色の頬、そしてピンク色の可愛い唇に…  
何度も何度もキスしたかった…！」

.....

うつ。く、くうつき…

あまりの衝撃に、私は息をするのも忘れていた。

そんなこととは気付いていないジークは  
トドメの一言。

「今、キスしたら怒る？」

ドカンッ！

私は反射的に、魔法で素敵な頭をぶん殴っていた。

びよびよびよ… 目を回した勇者様は

そのまま翌朝まで眠りこけたとさ。

やれやれ…

## 第8話 もう一度…（後書き）

ほんとに、やれやれです…。今後のジークの暴走が心配。

## 第9話 占者の予言（前書き）

流血の場面があります。苦手な方はご注意ください。

## 第9話 占者の予言

「うわっ！ 危ない！」

大きな声に、私は目を覚ました。

それは占い玉が、スルリと袋から飛び出し  
宙を舞っている瞬間だった。

この高さから落ちると、割れる！

そう身構えた時、大きな影が覆い被さり  
落ちる直前に、私を受け止めてくれた。

しかし直後に、ドスツという嫌な音がする。

「アキーム！」

ジークの叫び声に、はっと顔を上げると  
私を抱え込んだアキームの脇腹に  
短剣が刺さっていた。

ドクドク：真っ赤な血が噴き出して  
思わず、気を失いそうになった。

\*\*\*

サルルート国の北の国境にある商業の町ツグニ。

市場が建ち並ぶ賑やかな通りで、私たちは買い物をしていた。

これから会いに行く予定の

レフのお師匠さんである賢者さんがいるのは

北の果ての聖地。つまり極寒の地。

私は占い玉の中だから

温度調節ばっちりで、寒くないけど

もしそうじゃなかったら、絶対に行きたくない場所。

ということ、ジークたちは上着やらブーツやらの装備を  
買い揃えることになった。

すると、人混みの中、一つの噂が  
耳をかすめた。

「魔王……？」

「……復活」

「占者の予言だそうだ……」

魔王復活？

なにそれ。

ジーク、アキム、レフの足が揃って止まり。  
そしてくるりと進行方向を変えた。

足早に市場を抜けると、人の少ない裏道へ入っていく。

途中でジークが占い玉の袋に触れる。

「サリー、これから知り合いの占者を訪ねる」

あゝ、はいはい。

では私は、感付かれないように眠るときます。

グウゝ

という訳で、ここから以降は、またまた  
過去視で見た様子です。

細い路地にカツカツ…3人の靴音が響き  
やがて一つの簡素なドアの前にたどり着く。

トントントン

ジークがノックをして一步下がり、返事を待った。

少しして力チャリと、扉が開く。

「どうぞ」

中から小さな声がして、それを合図に  
3人は扉の内側へ身体を滑り込ませた。

それは暗い、小さな部屋だった。

一組のダイニングテーブルと  
書類棚のみが並んでいる。

そこに、ゆらりと一人の細い影が現れる。

お、お化け???

ジークはその人物に向かって口を開いた。

「相変わらず暗い部屋だな、シユクレ」

「申し訳ありません。今、蠟燭を点けましょう」

それは優しく穏やかな女性の声だった。

魔力を扱えるらしく、ぱぱっと  
各所に置かれた蠟燭が一齐に灯る。

それに照らし出されて、部屋の女主人の姿を  
見ることができた。

灰色の長い髪に、白く細い顔。  
飾りのない茶色のローブを身に纏っている。



しかし地味な色合いの中にある顔立ちは美しく、  
繊細さと同時に、高貴さも漂わせていた。

目は閉じたままだった。

それで分かった。彼女は盲目なのだ。

「勇者ジークフリード様、魔道士レフ様、ご無沙汰しております。  
そして傭兵アキーム様…」

ふと、アキームの名前を呼んだところで、言葉が止まる。

「ご無事で何よりでございます…」

当のアキームは無言のまま、彼女を見つめていた。  
オリーブの瞳に、複雑な色を浮かべて。

むむむ、何かある？ この二人…

「旅の途中でございましょう。

ここは何もない粗末な部屋ですが、どうぞゆっくりなさって下さい」

シユクレは3人に椅子を勧める。

「今、お茶をお持ちしますので  
少々お待ち下さいませ」

するとアキームが初めて口を開いた。

「ずいぶん物騒なことを口走ったようじゃないか」

ずいつと進み出て

台所へ入ろうとする彼女を制した。

「オレたちにも聞かせてくれないか」

アキームの低く、くぐもった声は

女子供を震え上がらすに十分な迫力を持っていた。

もしかして、アキームは怒ってるの？

しかしシユクレは取り乱すことなく

静かに頷いて応えた。

「承知いたしました」

そして3人をテーブルに座らせながら

自らも一緒に座に着いた。

「それはつい数日前、突然占い玉の中に現れました。

禍々しい意志を持った、闇の存在です。

私は、魔王復活と同義だと判断しました。

世界中の占者たちも、同じものを見ている筈です。  
しかし、恐ろしくて誰も口に出せないのです」

闇…

その言葉に、3人が顔を見合わせる。

「なぜ、お前はそれを口にしたんだ？」

そう聞くアキームは、真剣な表情だった。  
やっぱり彼は、シユクレのことをとても心配しているようだ。

「残された時間は僅かです。

少しでも警戒を強めておいた方がいい。  
それに……」

彼女は、ふっと寂しげな微笑みを浮かべた。

「私には失うものなど、何もありませんから」

「シユクレ！」

ガタン！とアキームが立ち上がる。

それをジークが制し、目を細めて彼女を見て  
首を横に振った。

「そんなことを言っではいけない、シユクレ」

すると、彼女は白い顔を俯かせた。

「申し訳ありません……」

アキームが、ふうつと大きく息を吐いて  
椅子に座り直した。

えっとつまり、魔王復活と予言したのはこの女性で

そして3人の知り合い、ということなのね。

シユクレは少しの沈黙の後、僅かに頭を振ってから再び顔を上げた。

「ジークフリード様。ところで一つ、お聞かせ頂けますか？」

そしてその視線が、ジークの腰へ移った。

「なぜ、レフ様でなくジークフリード様が  
占い玉を持っていらっしゃるのでしょうか？」

「ああ、それは…」

思いがけない問いかけに、ジークは少し言い淀んだ。

「西方の国の…廃墟となっていた城で夜を明かした時  
たまたま見付けたのだ。しかし大した魔力を宿していなかったの  
で、もらい手がなくて、持ち歩いている」

うーん、やや苦しい気もするけど、確かに嘘はない。

「そうでございますか。確かにあまり力を感じませんね。  
ただ…」

シユクレは小さく首を傾げた。

「何でしょう？ 中に何かの気配を僅かに感じるのですが…」

「それは…」

少し興味を惹かれたようで、ジークとレフが身を乗り出した。

「どんな気配だろうか？」

ボタン！！！！

レフの言葉が終わらないうちに、突然、玄関のドアが開いた。

そして、ビュッ！と風が部屋の中を駆けめぐる。

「なんだこれは！」

3人は立ち上がり、アキームは大きな体でシユクレをその影に隠した。

ギリッと、レフが唇を噛む。

「気配に気付かなかったとは……！」

「何者だ！」

シユウウ……と、嫌な気配がドアを潜って、部屋に足を踏み入れるのが分かった。

振り向くと、真っ黒なフードに顔を隠した人物が立っていた。目だけが真っ赤に光っている。

狂気を孕んだその赤い目に、その場にいた者は皆  
背筋をゾクリと震わせた。

「あの方を邪魔する者は、…消す！」

ドゥンツと突風が黒いマントの男の背後から襲いかかり  
気付くと、2つの占い玉が、宙に浮いていた。

一つはシユクレの。そしてもう一つは、あたしだった。

この高さから落ちたら、割れる！

ガチャン！と嫌な音がして  
先にシユクレの占い玉が床に叩き付けられたのが分かった。

次は自分と思い、ぎゅっと目を閉じ身構える。

占い玉が割れたら、私はどうなるんだろう？ どうなるんだろう？  
不安がぐるぐる、頭の中を駆け巡った。

しかしそれは起きなかった。

大きな影が覆い被さり  
落ちる直前に、私を受け止めてくれた。

見ると、アキームだった。  
あ、ありがとう！

しかしそこで安心など、してはいけなかったんだ。

フードの男が両手を上げた。

そこから数え切れない程の短剣が、こちらへ向かって矢のように襲いかかってきた。

キンツと、ジークが剣でなぎ払う。

しかし咄嗟のことだったので、全てを落とすことは出来ない。

勢いを保ったままの1本が  
ドスツと嫌な音を立てた。

「アキーム！」

ジークの叫び声に、はっと顔を上げると  
私を抱え込んだアキームの脇腹に  
短剣が刺さっていた。

ドクドク…真っ赤な血が噴き出して  
思わず、気を失いそうになった。

目に見えない早さで、ジークが移動して  
次の瞬間には、フードの男を真っ二つに斬っていた。

レフが呪文を唱えてから、指を頭上に掲げる。

「闇に捕らわれし魂よ。己に帰り、黄泉へ去れっ！」  
ブワツと男の顔が霧散して、残されたフードだけが  
ふわりとその場に舞い落ちた。

「魔剣にやられている。これはまずい…！」

うづくまるアキームに駆け寄り、レフが叫んだ。  
ギリツとジークは歯ぎしりした。

「魔剣ですって…、何てこと！」

アキームの身体を真つ赤に染める大量の血を目の前にして  
シュクレも私も凍り付いていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8930v/>

---

恋する占い玉

2011年8月29日00時56分発行